

# クリスマスの知らせ

(今年の12月号も去年と同様に、最近発行した「卒業生のための園だより」のメッセージに少し加筆したものをお届けします。)

幼稚園の中を白い羽根を背中につけた天使たちが駆け回り、袋を背中に背負った旅人たちが歩き回っています。いよいよクリスマスシーズンです。ちきゅう組の子の中には、聖書を持ち歩いている子もいます。4本のローソクに1本ずつ火が灯ってクリスマスが近付いていることを知らせています。そしてクラスでは、ページントの役決めが行われています。

ページントがどんなものかよく知っている子たちは、今年はこの役になりたいという気持ちを暖めています。希望通りの役になれる子、自分がしたい役に希望が殺到して、残念ながら願っていた役になれる子、いろいろ出てくることになります。でもページントはみんなで作り上げるものです。希望の役になれなくても、精一杯やって、友だちの一生懸命な姿も見て、みんなで立派なページントを演じ上げる喜びを共有してほしいと願っています。このような姿こそ本当にクリスマスを喜ぶものなのだと思います。

ページントには星や天使や宿屋や旅人や、たくさんの役が登場します。でも聖書にでてくるクリスマス物語では、登場人物はそれほど多くはありません。マリアとヨセフと、羊かいと博士ぐらいのもので、クリスマス物語の中心人物はこの人たちです。一般的に物語に登場する中心人物は、かっこ良かったり、大活躍したり、華やかだったりするものです。けれども聖書に登場するこれらの中心人物は、どれもかっこ良くはなく、大活躍をするわけでもなく、華やかでもありません。むしろその逆に「世の中でヒーローになれない」人たちでした。

マリアとヨセフは、田舎町ナザレに住んでいる大工とそのカミさんになる予定のむすめです。お城に住む身分の高い娘でもなく、金持ちの家のお嬢さんでもない、何のとりえもないむすめです。羊かいはもっと地味で、みじめです。町に住む人々のような生活はできず、人々からは仲間に入れてもらえぬノケ者だったのです。宝物を持ってやってきた博士たちは、立派そうに見えます。けれども博士たちは外国人でした。ユダヤの人は外国人を見下げていて、一緒に付き合うことは禁止されていました。ユダヤに滞在している間は、博士たちはだれからも相手にしてもらえなかったことでしょう。

こうしてクリスマス物語の中心となる人々を見回してみると、何のとりえもない人、まわりからノケ者にされている人、人々から相手にしてもらえない人ばかりです。「こんな自分なんて、いたってしょうがない」と思いたくなるような状況に置かれていた人たちです。その羊かいにむかって天使は「今日、あなたがたのために救い主が生まれました。」と告げたのです。こうして羊かいたちは世界で最初にイエス様に出会う人になりました。

神様はヒーローにはなれないこういう人たちを選んで、イエス様誕生の中心人物役を担わせてくださいました。これは今でも変わりません。神様はヒーロー気分の人やヒーローになろうと狂奔する人でなく、ヒーローになることなく埋もれてしまっている人、踏んづけられている人、はじき出されている人を一番大切に思っています。「こんな自分なんて、いてもしょうがない」と思うとき、「そうではない、あなたにうれしいお知らせをします。そういうあなたのために、今日救い主が生まれました。」というニュースが届くのです。だから、クリスマスおめでとう！なのです。2000年前に羊かいに届いた知らせが世界中のすべての子どもたちに、今年も告げられます。さあベツレヘムへ行きましょう。